勿忘草の心臓

梅吉

――その時、隣に在った親友は、私の腕を引いた。
立ち上がる事に疲れていた。もう一歩だって進めやしないと思っていた。
しかし、意気地のない意志に反して、この足は軽やかに踏み出していた。
そうしたいのだと言うように、踏み出していた。――

主人公のお陰で再び前を向いた親友の章が終わり、残った紙の幅を横からついと眺める。
あと一章ほどで終わる厚さだった。私はその紙の隙間に、花が押し固められた栞を差し入れ本を閉じた。

本というものは、どちらかといえば好きだ。月並みな言葉だが違う世界との出会いを楽しめる。けれど、私が終わりまで読むことはあまりない。本当に本が好きな人からは怒られそうなので、どちらかといえば、だ。

それというものは。最後というものは、そんなに重要なことかと思うのだ。例えば電車で本を読み、窓の外に視線を投げながらアナウンスと共に栞を挟む。鞄の隙間に本を滑らせて、荷物を持って立ち上がる。そうして一歩電車の外に出た時には、その世界のことな

んてすっかり忘れていたりする。それでいいのではないか。人は忘れるからこそ生きていけると言うし、率先して忘れていけばきっともっと生きやすくなるという算段だ。次にこの栞を見る日まで闇落ちからやっと立ち直った親友にどんな最後が待っていようと、忘れているなら無いも同然。楽しいところだけ楽しめれば十分だ。

けれど……読み終わってしまったなら、私はその結末を忘れない。ひとつの終わりは感情を伴うものだから。最後というのはいつだって寂しいものだと知っている。物語に必ず訪れる、寂しさという感情を伴う最後を、私は楽しむことができない。

ならば、知らなければいい。覚えていなければ気にもならない。終わりを気にしないというのは、人生を楽しく生きるコツだ。いつか寂しい気分に浸りたくなったら、その時にまた栞を開いて思い出せばいい。人間時には母のない子のように、寂しさに黄昏てみたい時もあるだろう。母は実家にいるけれど。

つまり私にとって栞というのは、出会いという楽しさだけをくれる都合のいいもので、人生において無くてはならない物なのだ。

さて、栞を挟んだ本を膝に持て余して、現在。

母のない子の気分を味わうには若干雰囲気が足りないと、豊かな大地に香る潮、そよ風に揺れる前髪を額に受け止めながら思った。

……へいわだ。飽きるほどの平和だ。

立ち寄った商店街のくじ引きで当たった、くじら島への片道切符。くじら島ってどこ？しかも片道だけ？　謎すぎて逆に興味を持ち来てみれば、なんということはない。その商店街の一番近くにある、魚の仕入れ先の田舎島だったというだけだ。

飽きるほどの平和を洗濯バサミに挟んでそよがせているド田舎だと薄々気づいてはいたが、まさかバスが来るのを待ちながらベンチで本を読んでいたら半日が過ぎていた、なんて酷い笑い話だ。そのうち来るだろうと時刻表をまともに見なかった私が悪いのだけど。

「アレ、ねぇキミ。今日はもうバスこないよ？」

風化で掠れた訳ではなく、そもそもがほぼ真っ白だった時刻表を近くから遠い目で眺めていると、通りかかったツンツン頭の少年が、私が半日かけて知った事実を言った。一人の間抜けな笑い話に、他者が入ると途端に恥ずかしくなることって、ない？

「……そ、それは、どうも」

「どうしたの？　お父さんとはぐれたの？」

おとうさん。

いや、父も実家にいるけれど。

恥ずかしさを押して返事をしたら、なんてことだ、迷子に間違われている。

彼は自分をゴンと名乗った。キミはと問われたので簡素に答える。

「ええと、そうじゃなくてね。私、ここに観光で来たんだ。ひとりで」

「あっ、そうだったの。ごめんね、同い年くらいに見えたから」
「十八には見えないけど」
「あれ。ごめんなさい、年上のおねーさんだった」
へへ、と頭を掻きながら、ゴン君は少し申し訳なさそうに笑った。五つも年下だった訳だが、それにしては丈夫な体躯で驚いた。まあ、こんな田舎島で珍しい事だけれど、彼は念能力者のようだし、こんなものなのかもしれない。出会った中では最年少なので比較対象はいないが。
「どこか行ってみたかったけど、今日はもう遅いから宿に帰るよ。教えてくれてありがとう」
「ううん。あ、港に自転車のレンタル屋さんがあるから明日は借りたらいいよ」
同い年と見間違われるくらいだから、私の成長期は早めに止まっているため身長に大差はない。お礼の言葉を返し、そうして近くにあるツンツン頭へと自然に手を伸ばした。
「〝勿忘草（マーカーメーカー）の栞〟」
油断したゴン君の顔が一瞬で強張る。
目の前のものを見失った時のようなぼんやりとした表情に変わった。私は具現化した押し花の栞を流れるように懐に仕舞いながら、元々何も無かったかのような自然さでゴン君

の視界を横切った。
これで情けない現場を見られた事も、迷子を心配されたことも、私だけの記憶。何かひとつの物事に対する記憶を封じる、私の能力だ。今回は私と話をした記憶を封じさせてもらった。ゴン君が記憶を思い出すには、引き換えに具現化されたこの押し花の栞に触れなければならない。
――ほら、栞っていうのは私にとってそういうものだから。
速やかにお手軽に、忘れるためのもの。出会いだけがあって、別れがない。とっても便利で都合がいいもの。バスの来ないバス停で半日待ち、年下の少年に迷子を心配されるような間抜けは、宿に着く頃にはもう忘れているだろう。
誰の記憶にも残らない出来事は、読む人のいない本と同じだ。作者だけがいて、読者がいない。そんなもの、無いのと同じだから。私は宿へと引き返すため歩みを早めた。
「ねえ、キミ！」
――ゴン君の声。
話しかけられたのは、この場に居るただ一人。
「……なにか？」
まさか、能力を遮られた？　ちゃんといつも通り手応えはあった筈……。
おそるおそる振り返ると、ゴン君の顔がすぐそばにあった。

一瞬で詰めた距離と運動能力に驚いて仰け反るが、その隙間さえ埋められて半歩後退る。至近距離で見た大きな目がキラキラと輝いていた。

「どこから来たの？　この島に同い年くらいの子ってすごく珍しいから……あっ、オレはゴンっていうんだ。暫くこの島にいるなら、今度一緒に遊ぼうよ！」

――という、ハイ・コミュニケーション能力を目の当たりにして、困惑で満たされた私の重い頭は縦にこっくり頷いていた。そもそも記憶を封じた直後に話しかけられた事も、きっかけも無しに自己紹介された経験も無かった私には、あの状況下で冷静な判断なんて出来る筈もなかった。

とはいえ、結果としては良かったかもしれない。この能力はひとりに対して一日一回という制限がある。そのため、明日また今日の分を含めた私の記憶を封じなければならない。

……旅先での出会いなんて。

そんな、お別れが三ページぐらい先に見えているような始まりなんて――私は。

次の日。ゴン君は私の泊まっていた宿屋の主人と随分気軽そうに話をしていた。

「あっ、おはよ！　よく寝れた？　あのね、オレこの島でガイドみたいなことしてた時があるから、色々案内出来るよ。どこか行きたいところある？」

……と、久々に見る、他人が他人へ向ける笑顔が、自分に差し出される。知り合って間

もない、しかも彼から見れば一言くらいしか会話をしていない相手に、こんな満面の。悪い気はしないけれど、どうしたらいいのかも分からなかったので曖昧に笑っておいた。どうせ君は忘れるのだから、上手く返せなくたって別にいい。

美味しい魚料理屋さんをいくつか紹介してもらって、それから島唯一の本屋さん、島唯一の雑貨屋さん、島唯一の駄菓子屋さんに連れて行ってもらった。

……なるほど、そういえば下田舎だった。一番ラインナップが充実していたのが駄菓子屋という所に、平和がそよいでいる一端を感じる。人気ラインナップはおつまみ系に偏っているようだ。

「何の本買ったの？」

「さあ、読む本が無くなっちゃったから、なにか適当に」

「本好きなんだ。オレは全然読まないんだけど、そういえば提出しなきゃいけない課題の中に読書感想文とかあったなって思って、文字の大きいやつ選んだんだ」

「あんなのあらすじ書いておけば最後まで読まなくたっていいの」

「そういうもん？」

「どうせ忘れるし、そういうもん」

「そうかなぁ」

一日を通して、ゴン君は色々なところで有名人だと知った。昔から好奇心が旺盛で、至

る所でお手伝いやら人助けやらをしていたらしい。良い子だな。
そんな良い子のゴン君は、私を宿まで送り届けてくれた。この場面を想定していた私は、ゴン君が背を向けたタイミングで能力を使った。私に関する記憶を封じ、すぐに扉を閉める。物理的に視界から外れてしまえば昨日の二の舞にはなるまい。そうして駆け足で部屋へと戻った私は、ベッドに身を投げた。

……なんだかんだ、楽しかったな。
手の中にある栞を照明に透かして見る。明るい橙色の花だ。昨日のは薄い黄色の花だった。当人の、封じた物事に対する意識によって色は変化する。ゴン君も楽しかったのかな。朝の笑顔も、島を案内している時の頼もしい姿も、行く人行く人に声を掛けられて手を振り返している姿も。
……最後、またねと約束をくれた握手も。
――どうせ覚えていないくせに、と理不尽なことを思った。

この能力は、本当に私のようだ。矛盾した私そのもの。
忘れたいなら栞を挟まなければいい。
ページを閉じてしまって、二度と開かなければいい。
そもそも、本を読まなければいい。

――それでも、会わないという選択は、できなかった。
終わりを渡さないのに、出会いは訪れた。
本ではない私は、生きている私は、読者のいない作者になれない。
だから私はこうすることに決めたのだ。
会うことがなければ、思い出さなければ、いつか忘れてなくなる。

二枚の栞を買ったばかりの本に差し込み、そのまま閉じた。
栞の続きを知りたいだなんて。
……また、会いたいだなんて。
こんな気持ちも、きっと忘れる。
本を胸元に抱え込むと、その日はそのまま眠りについた。

平和が停滞するこの島で、こんな湿っぽい気分はいつまでも保つものじゃない。少し遅めの朝食を教えてもらった魚料理屋で摂っていると、あっ、と随分聞き慣れた声が飛び込んできた。驚きに舌を噛みそうになる。危ない危ないとゆっくり口を開いた時には、すでに私のテーブルの横に、いた。
「ねえ、この島は初めて？　オレはゴン！　歳の近い子ってあんまりいないからつい話しかけちゃった。よかったら島案内するよ！」

や、やっぱりか……と諦め半分、喜び半分。ゴンは手伝いを先に済ませてくるからこの店にいてね！　とサッと飛び出し、沢山の荷物が縛り付けられた自転車に乗って行ってしまった。窓越しに手を振られて、うっかり振り返してしまう。咄嗟に構えた笑顔がぎこちなく無かったか、少しだけ気になった。

……このくじら島、出稼ぎの漁師が長期滞在するための島だって、たしか三日前のゴンが言っていた。ここら周辺の島でも一番の漁獲量を誇るのだとは、二日前のゴンが言っていた。観光客なんて珍しいし、しかも背格好が似てるからつい話しかけてしまうらしい。すでに五回目の出会いとなるのだからそろそろ気づいてはいたけれど。

……菜も、その数だけ溜まってしまっている。

「お待たせ！　あ、ここの魚料理おいしいよね」

戻ってきたゴンは正面席に座るなりそう話を振った。私の顔を見て言ったので、慌ててひとくち頬張り頷く。私は今どんな顔をしていたのか。

「どこか行きたいところはある？」

「行きたいところ……広くて、見晴らしがいいところに」

「わかった、オレのオススメでいい？」

「まかせるよ」

ゴンがお手伝いで使っていた荷台付きの自転車に乗って移動し、なんとも言えぬ恥ずか

しさを抱えながらいくつかの場所を巡った。これまでは徒歩で近場のお店を見ていたため、二人乗りは初めてだった。
青春の代名詞、二人乗りというのは凄い。当たり前に距離が近いし、掴まってと言われて腕を回したゴンの腹筋が、歳不相応に鍛えられていて妙に恥ずかしかった。ついロ数も減る。
「どうしたの？」
「……あ、なんでもないよ」
「疲れちゃったかな。ここで最後にしよっか」
「そう……そうだね」
徐々にスピードが落ちて、目的地に着いた。
ゴンから離れて思う。ゴンって、暖かいんだ。触れ合えば温度が移り合う筈なのに、ゴンは私を暖めるばかりで、私の温度なんて私が何をしようが何であろうが、関係ないとばかりに無遠慮だった。
離れると、この温度差が――寂しいと思った。
唐突に、無性に。本が読みたくなった。
栞を挟んで、記憶を封じて、最後まで読まなかったいくつもの、いくつもの、続きが知りたくなった。今まで私が得ないようにしてきた終わりとは、全然違っていたから。

最後の場所は、本当に広くて見晴らしがいいだけの場所だった。
視界一帯が草原で、太い木が一本だけ立っている。その影に入るように二人で腰を下ろした。ゴンが私の座る場所にハンカチを敷いてくれたのが、少し恥ずかしかった。
「ねえ、嫌だったらいいんだけど、ちょっと手繋いでいいかな」
「えっ……うん、いいよ」
もう一度あの暖かさに触れたい。そう思って言ってみれば、驚いた顔をしたもののゴンは快く片手を差し出してくれた。その手を上から被せるように握ると、懐に引き寄せて体を屈めた。
まるで大切なものを奪われたくなくて、両手で抱えて拗ねている子供のようだと思った。腕を引かれる形になったゴンは動く様子のない私に観念してか、触れ合うほど近くに座り直して、握る手の力を少しだけ込めてくれる。
人に寄り添えるゴンは、優しいだけじゃない。きっと痛みを知っているんだ。
私はそんなゴンを騙している。私が今ゴンの手に縋り付くことが出来るのは、ゴンが私を忘れるからだ。この後に及んでこんなに優しい人を騙しているのだと思うと、もう顔も見られない気がした。
「……ねえ、どうして、ひとりでくじら島に来たの？」
「私は元々ひとり旅をしてたから、そのついでに」
「どうしてひとり旅してたの？」

「どうして……家を出れれば、なんでもよかったのかも」
「家、嫌いなの？」
「……嫌い、になりたくなかったの。ゴンには悪いけど、私の両親はちゃんと健在してるし、特別仲が悪いわけじゃない。でも、なんだかダメだった。私がダメになりそうだった。だから、あそこを出なくちゃと思ったの。たぶん……」

――寂しかった。
何をしても寂しさが消えなかった。
誰かと一緒にいる時ほど、それは強くなった。
ひとりにならなくてはと、そうして寂しさを忘れてしまわなければと思った。
けれど、そうすればするほど私の手元には栞が溜まっていった。
無いはずの記憶ばかりが積もった。
寂しさだけが私の手元に残った。
「……寂しいのを、ひとりでなんとかしようとしてたの？」
「ひとりじゃなきゃ、無くならないし、誰かといれば、始まってしまうから」
「……だから、オレの記憶を閉じ込めてたの？」

キィン――と、耳鳴りが走った。

反射的に手を伸ばしたバッグは開いていて、その延長線上には一冊の本があった。あの日から一ページだって読めていない、挟まる栞だけが増えていった本が、本だけが――。

この現状が指し示すところを理解して、もう顔も見られない、だなんて思っていたゴンを見た。騙していたことを知られた。記憶を封じて、奪って、一緒に居たことを無かったことにして、知らん顔で傍に居続けた私を知られてしまった。

その時の私は、ゴンに何を望んでいたのか、分からなかった。

許して欲しかったのか、許さないで欲しかったのか。鳴る心臓の音だけが私の気持ちを代弁しているのに、この後に及んでその心臓が縋っているのがゴンの手だという、矛盾した私をそのままにしてくれる筈の栞が、私の栞が、消えてしまった。

出会う度に始まりも終わりも奪って、無かったことにした。

誰にも読まれない本のように。存在して無いのと同じように。

存在しない筈だった終わりが来てしまう。……その前に。

ゴンの言葉を聞こう。それで、その後宿に戻って、私が忘れよう。それから……。

私が最後の誠意としてゴンの言葉を待っていると、四枚分の記憶を整理したらしいゴンの顔が、情けなく歪んだ。

――どうして。
どうしてゴンがそんな悲しそうな、悔しそうな顔をするの。悪いのは私なのに。
くしゃりと歪んだ目元に手を伸ばすと、辿り着く前にしかと取られて――そして正面から向き合った。
「ごめん……オレ。何度も、何度も、自己紹介してる。これ……嫌だね。オレだったら、嫌だよ」
そう告げられて、何よりも真っ直ぐな目が、伏せられた。
ゴンが、悲しんでいる。
繰り返した出会いと、忘れた別れを知って、悲しんでくれている。
私との始まりを、私との終わりを――。
言われた意味を理解した途端、私は泣いてしまった。
わっと、元々満杯だったコップに、同じ分だけの水を一気に注がれたように、涙が溢れてきてしまった。
バカなのか。
バカじゃないのか、私。
なんで私が泣くんだ。まず謝るべきだ。
粛々とゴンの怒りを受け止めて、宿に戻って忘れようと算段をつける前に、終わりを悲

しむ前に、寂しさを忘れる前に……私はゴンに謝って、それからゴンのせいじゃないよって、ゴンが悪いことなんてひとつもないんだよって言わなくちゃいけなかったのに。

それなのに。

縋った手を振り払わずにいてくれる。

始まりと終わりを悲しんでくれる。

ああ、寂しくなりたかった。

私は、ちゃんと寂しくなりたかった。

終わることへの寂しさでもなく。

忘れることへの寂しさでもなく。

触れた温もりを失う寂しさを。

そして、また手にする時の幸せを感じたかった。

この愛しい寂しさは、自分ひとりでは、得られなかったというのに。

こんなに大袈裟に泣いてしまって、寂しさもきっと逃げ出してしまったに違いない。

帰ったら、本の続きを読もう。友の腕を借りて本当の自分を見つけ出した、妙に主人公よりも出番の多い親友が最後どうなったのか、私は知らなければならない。

それが、愛しい寂しさと出会える、唯一の方法なのだから。

HUNTER × HUNTER 非公式ファンブック
夢小説ネームレス短編集『花が散ったら生きてやりたい』
第一編『勿忘草の心臓』
web 再録　ネームレス用に加筆修正有り

梅吉